

芸豪烈伝その33

てんちゅうけんつきこ
天中軒月子私って人生の修行するために
生まれてきたのかしら

写真・森 幸一ほか 文・おさだ衛



てんちゅうけん・つきこ。本名・福本幸代。岐阜県郡上八幡町の出身。中学2年に四代目・天中軒雲月（平成7年3月死去、79歳）の弟子となる。歌手志望だったが雲月師の「浪曲は地道だが長くできる」が決め手だった。昭和49年、郡上八幡町で年期明けの名披露目を行なった。中京の浪曲界を背負って立つ。十八番は天中軒のお家芸の「佐倉義民伝」「中山安兵衛」など。新作「徳川家康」にも意欲を燃やしている。

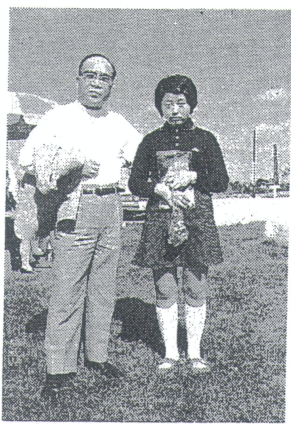
堂々とした押し出し。師匠ゆずりの豪快さと繊細さを兼ね備えた舞台。緩急自在の節回しと、鍛え抜かれた声の良さ。月子は四十代なかばながらキャリア30年の手練れだ。

「私は今でも修行中のことを夢にみては泣くこともあるんですよ」

昭和43年2月に天中軒雲月の門下生となり、昭和44年に中学を卒業して内弟子となった。内弟子で5年間、のちに3か月、お礼奉公をした。

「師匠は芸には厳しくて木頭ひとつ、おろそかにしません。木頭一丁で芸が生きるか死ぬかが決まる、が口癖でした。ですから失敗すると木頭で頭をたたかれたこともありました。」

師匠が舞台上に上がるときに私が木頭を打ち、師匠が外題づけを終わった時には客席に回って私が拍手をします。地方では、こういうキッカケが大切なんです。そして舞台裏に戻り、バラシに



昭和48年、17歳。北海道の巡業。師匠の雲月と。「辛抱しろよ。努力して自分から大きくなるように。冒険を恐れるなとも教えてくれました」

入った木頭です。浪曲の木頭では私には誰にも負けないですよ。あははは」

内弟子の修行は朝はやく起きて掃除、洗濯、炊事、自分自身の稽古から師匠の世話と気の休まる時がなかった。

「故郷を出る時は立派な浪曲師になればよと親類や近所の人に励まされて東京にきました。修行がつかいといって三日坊主で帰ったら両親が親類や近所の人にバカにされて可哀相だと思って、つらいのをこらえたんです」

師匠の教えが血となり肉となった。

「貧乏してる時に良い服を着ろ。周りの人に、いい仕事をしていると思わせるのが大事と師匠は言っていました。」

ですから私はいつも舞台では、いい着物を着てるんですよ。あはは」と陽気で明るく冗談を飛ばす月子師は舞台での印象どおり生命力に溢れている。雲月師は生前、月子師に十八番の「佐倉義民伝」と「決戦厳流島」の口演の許可を与え台本とカセットを渡している。

「師匠は情のある方でした。師匠が亡くなる直前に手紙をいただきました。」

いまも大切にしているんですよ。その手紙には雲月師が達筆で「月子の大成を見るまでは死ねません」と書いてあり、師と弟子の絆の強さが窺える。

いま月子師は18年来の合三味線の酒井時枝さんと新作「徳川家康」シリーズに取り組んでいる。そして師匠が行なっていた仕事も受け継いでいる。

「浪曲は今は守りの状態です。ブーム作りには仕掛け人が必要です。友だちでマスコミでレギュラーのコーナーをたくさん持っている河内家菊水丸さんに浪曲の仕掛け人になってよ、なんて話をするんですよ。もちろん私たちも東西交流やら、いろいろ努力しなきゃいけないんですが」

月子師の特技は、曲師の物真似だ。物真似は芸人の重要な特性で、一流の芸人は表芸にはなくてもお手のものなのだ。この取材には曲師の吉野静、



昭和48年、17歳。浜松駅。右端が雲月。真ん中が東家三隻（初代・東家浦太郎）。その右が月子。左から二人目が名曲師の平松佳代。「私は初舞台から曲師は平松佳代師匠だったので、とても勉強になりましたね」

岩崎節子の両師も同席した。昔が懐かしいですねえと言って月子師が山本太一、平松佳代、大林静子師匠の真似を身振り手振りでやってみると大受けだった。ひとしきり笑わせておいて、「こんな真似をして師匠によく叱られました」。

それにしても私って生まれてこの方、楽しいことがあったかしら。世の中に修行しに生まれてきたのかしらね」父親が大酒飲みの酒乱で生家が貧乏だったこと、中学校時代のいじめ、内弟子時代の厳しい修行、3人の娘をもうけての離婚。



昭和48年、17歳。神戸の国際会館での「浪曲忠臣蔵」の「神崎東くんだり」。手前の右は東家浦太郎（当時・太田英夫）。左は京山小園嬢。後列の右端は玉川勝正、その左は筑波武蔵。月子は後列の左端。

「そして浪曲はモノになるまでに時間がかかりすぎる。難しいのに金にならない。あははは」。月子師の苦労話は山あり谷ありで一席の浪曲のようだ。天性、人を楽しませる資質に富んでいる。義理と人情を知り、鉄火肌で先が読める女ざかりの月子師は今も独身だ。

「誰か、やさしくて子供を養ってくれる男の人はいないかしら」と言うと、吉野静師が「ジジイで金持ちで、すぐあの世に行くような人がいいね」と大笑いして、お開きとなった。



昭和56年。クラウンレコードにて。右は歌手の笹みどり。真ん中は浪曲作家の房前智光。笹みどりの歌に、セリフと浪曲の節を吹き込んだ。「歌手になりたいという長年の夢の一部が叶ったような気持ちでした」

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

38
52

浪曲家の皆さん…頑張ってください。
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉